

あるところに、ある二人の兄弟がすんでいました。

二人はまだ若く、とても仲のいい兄弟きょうだいでした。

二人は森に住み、狩かりをして生活をしていました。そしてその肉や毛皮を町の市場で売るのは、その売ったお金で市場で売っている野菜やさいや着物きものを買かってくるのです。もちろん、森の家の周りまわには畑を作って、いろんな木などを植えていましたが。

森はとても住みやすく、静しずかで、時折木々ときおりを揺ゆらす風の音が聞こえてきます。夜になるとふくろうのクークーという鳴き声や、遠くで狼おおかみの遠吠とおぼえがするのは。そんな声に耳をすませながら、二人は満足まんぞくしてベッドで眠りにつくのです。

早朝そうちょうなどは、のぞき窓あを開けると冷たい朝霧あさぎりが部屋へやの中にすべるように入ってきます。弟は窓にかじりつくようにして外の景色けしきをながめました。

畑の木も森の木々もみんな霧きりに包つつまれていてよく見えません、弟はしばらくそうやって外を見ていました。そうやって、いつもそうやっているのです、それが彼にとっていちばんしあわせな時なのでした。

ある日、二人はいつものように森の奥^{おく}に狩りに出かけました。しかし、今日はどうしたものか全く獲物^{えもの}が獲れ^とません。二人の放つ矢はまったく獲物にあたらないのです。二人は狩^かりの名手^{めいしゅ}でしたからこんな事は珍^{めづら}しいことでした。

二人は獲物を追^おってどんどんと森の奥^{おく}に入っていました。

そうしていると、いつの間にか少しひらけた場所に出ました。

その辺りは全体に木が低くまばらで、明るく日がさしこんでいます、見たことのないところでした。

すこし離^{はな}れたところに一軒^{いっけん}の家が見えました。

二人は顔を見合わせると、だまってその家をめざして足早に歩きはじめました。

近くまで来ると二人は立ち止まり、その家をながめました。その家は不思議^{ふしぎ}なことに、兄弟のすんでいる家ととてもよく似ていました。

弟がとまどっていると、兄は家の扉^{とびら}が開^{ひら}いているのを見

つけ、^{とびら}扉に向かつて歩きはじめました。弟もすこし^{おく}遅れて兄のあとをついて行きました。

家の中はうす^{ぐら}暗く、開いた扉からの光が^{おくない}屋内をうっすらとうかびあがらせていました。

そこには^{つくえ}机と台所といったわずかな^{ちょうどるい}調度類があるだけで、ほかにはベッドがあるだけのじつに^{さっぽうけい}殺風景な部屋でした。

ベッドの上には一人の老人が横になっていました。老人はいつから^そ剃っていないのか、ずいぶん長いひげを胸から腹にかけてのせていました。

老人は横になったまま二人を見ました。

「こっちへおいで」

かすかな声でした。

二人は声にひかれるように^{ろうじん}老人の^{かたわ}傍らに^よ寄りました。

「待っていたよ」

老人は笑ったようにみえました。

「待っていたって、僕たちを？」

兄がけげんそうに聞き返しました。

老人は小さく笑いました。

「お前たちかどうかはわからないがね」

老人はしばらく黙^{だま}って天^{てん}井^{じょう}に目を向けていましたが、やがてわずかに動く右手で部屋^{すみ}の隅^{すみ}を指さしました。

老人が指^さした部屋^{すみ}の隅^{すみ}には、弓矢^{きゅうや}が一つと一本の杖^おが置かれていました。弓矢も杖もとても立派なもので、とくに弓矢などは黒^{くろ}光^{びか}りしてどんなものでも狩れそうな気がしました。杖^{つえ}も丈夫^{じょうぶ}で、持ち手のところに立派^{りっぱ}な彫^{ちよう}刻^{こく}がしてありました。

「それをお前たちにやろう」

老人は横になったまま兄弟に言いました。

「その弓矢はどんな火^はでも放^{はな}つことができる。そしてその杖は持つものが好きなだけ生きることができる。すきなほうをそれぞれ二人で持つがいい」

兄はそれを聞くと顔^{こう}を紅^{ちよう}潮^{しやう}させ目^めを輝^{かが}かせました。そして、弟^{いぶか}は訝^{まゆ}しむように眉^{まゆ}をひそめました。

「そのかわりに私^{ねが}の願^{ねが}いをきいておくれ。私はもうじき死んでしまう、そうしたら私^{いっしよ}をこの家^もと一緒に燃^もやしておくれ」

やがて老人は死に、兄弟は約束どおり老人の骸^{むくろ}を燃やしました。

兄はどんな火でも放^{はな}つことができる弓矢を、弟は好きなだけ生きることができる杖を手にした。

老人の家は老人とともに炎^{ほのお}につつまれました。二人は長い間その火を見守っていましたが、やがて弟は手にした杖をその炎の中に放^{ほう}り込^こみました。

おどろいた兄が大声で弟に言いました。

「なにをやるんだ、そんなことをして」

「いいんだよ兄さん、こんなものはいらないんだ」

「なにを言っているんだ、それがあればずっと生きられるんだぞ」

「兄さん、僕たちはやがて死ぬんだよ、そうして僕たちは命をつなぐんだ、人間はそうやって永遠^{えいえん}に人生を楽しむ道をえらんだんだ、だから人間はけっして大人^{おとな}になることはないんだ」

弟は兄のほうを向くと、腕^{うで}をのばして開いた手のひら^さを差し出しました。

「だから兄さん、兄さんにそれは使えないよ」

兄は弟の目をのぞき込むと、^{おそ}恐れるようにあとずがりし、
弓矢を^{にぎ}握りしめると^{きびす}踵を返して森の奥へ消えていきました。

老人からもらった弓矢はとてもすばらしいものでした。

ほんの小さな火を^{ねが}願うだけで、どんな動物も^{し と}仕留めることが
できました。おまけに、矢を一本放つ^{たび}度にすぐに新しい矢
が現れて弓につがえられるのです。それだけではありません、
矢はどこまでも遠くに飛んで行きました。

兄はもともと弓の^{めいしゅ}名手でしたので、どんなに遠い^{えもの}獲物にも
^{めいちゅう}命中させることができたのです。

兄は、弟から逃れるようにしてとても遠くの町にやってきました。

そこで兄は狩りをして、たくさんの動物の毛皮や肉を市場
で売って、これまでとおなじように^く暮らしました。ただこれ
までと違っていたのは、もう自分で畑を作らなくなったこと
でした。なにしろ畑で作るものは、たくさんの毛皮や肉を売
ったお金で手に入れることができましたから。

ところで、その町にはちょっとこまった嫌われ^{きら}者^{もの}が住んでいました。そいつはやたらと他人^{ひと}のものを欲しがるのです、おまけに気に入らないことがあると乱暴^{らんぼう}をふるうのです。なんといいてもとても大男で、だれも文句^{もんく}をいえないのです。

その町にやってきて一年ほどが経^たちました。

兄はいつものように森へ出かけて行きました。そして、その日もいつものようにたくさんの獲物^{にぐるま}を荷車にのせて、家に帰ろうとしていました。

その途中^{とちゅう}の分かれ道のところにある大きな石に、男が一人腰掛^{こしか}けていました。兄がその横を通りすぎようとする、その男が声をかけてきました。

「やあ、すばらしい獲物^{えもの}じゃないか」

男は腰掛けたままにやにやと笑っています。

「ああ、ありがとう」

兄は笑って返事をしました。

兄が男の横を通りすぎようとする、それまで座^{すわ}っていた男が立ち上がり、おやっと言いました。弟が振り返^ふると、男は荷車^{にぐるま}の上の獲物^{えもの}をさわっています。

「なにをしてるんだ」

兄は男に言いました。

男はすぐには返事をせずにじっと荷台の獲物にだい えものを見ていましたが、おもむろに兄の方を向くと、

「いやなにね、これは俺の獲物じゃないかと思ってね」と言いました。

兄はびっくりして男に言いました。

「なにを言ってるんだ、これは僕が狩かったものだぞ」

男は平然へいぜんと答えました。

「じゃあ、これはなんだ、この獲物にやじりくいこんでいる矢尻は俺おれのものじゃないのか」

兄はあわててその獲物にさ刺さっている矢尻やじりを見ました。たしかにそれは兄の矢のものではありませんでした。

男は勝ち誇ほこったようにいいました。

「どうだ、これはおれの獲物だ、お前は泥棒どろぼうだ、ほかの獲物も盗ぬすんだものじゃないのか」

兄は言い返そうとしましたが、男はすごい形相ぎょうそうで兄をにらみつけました。そうして、男は兄の狩った獲物をみんな取

りあげてしまいました。

次の日も、その次の日も男は兄から獲物を取りあげてしまいました。

その次の次の次の日、男がいつものように兄を待っていると、荷車に獲物を積^つんだ兄がやってきました。男はいつものように「やあ、すばらしい獲物じゃないか」と言いました。

兄は言いました。

「もうおまえにやるものは何もないよ」

すると、男は立ち上がり、兄を見おろすと、恐ろしい顔をしてくちびるをゆがめて笑いました。そして、兄に襲^{おそ}いかかろうとしました。

そこで、兄は小さな火の矢^{つか}を使い、男を殺^{ころ}してしまいました。

兄が男を殺してしまったので、町はずいぶん住^すみやすくなりました。そして、町の人たちは兄に感謝^{かんしゃ}をし、とても親切^{しんせつ}にしてくれるようになりました。兄はすごく居心地^{いごこち}のいい場^ば所^{しょ}を手に入れたのです。

しばらくして兄は、兄の評判^{ひょうばん}を聞^ききつけたその国の王様

に呼ばれました。

王様は言いました。

「この国は今、^{となり}隣^せの国から攻め込まれている。しかし我^わが
国の^{ぐんたい}軍隊は弱^{よわ}いので、とても^{となり}隣^{ぐんたい}の国の軍隊にはかなわない
だろう。そうするとこの国の^{ひとびと}人々はみんな^{ころ}殺されてしまう、
そうなのは^{たいへん}大変だ、そこであなたの力をお借^かりしたい」

王様は大きくため息^{いき}をつきました。

「僕にそんな力はありませんよ」

兄はすぐに答えました。

「いや、あなたには火^ひの矢^やがある、それを使^{つか}えるのはあなた
だけだ。そうだ、こうしよう」

^{おうさま}王様^{よこ}は横を向いてひとつせき払いをしました。

「あなたが敵^{てき}をやっつけてくれたら、その国の王様になれば
よい、どうだそれでいいだろう」

兄はうやうやしく礼^{れい}をすると、王様の前^さから下がりました。

^{よくじつ}翌日、兄は^{いっしょ}軍隊と一緒に^{となり}隣^{こっきょうせん}の国との国境線に出かけて行
きました。

国^{こっきょう}境では二つの国の軍隊がたがい^あににらみ合っていました。なるほど、よくみると相手^{あいて}の軍隊^{ほう}の方がだんぜん数が多い^あそうでした。

一緒にいた司令官^{しれいかん}が兄^いに言いました。

「見ての通り^{とお}、敵^{てき}はいまにもわが軍^{せい}に攻め込^こもうとしているのです、すぐに蹴散^{けち}らしてください」

兄は大きな火^ひの矢^やを使うことにしました。

兄は弓矢をかまえると、はるか遠^{とお}くにいる大軍^{だいぐん}の真^まん中^{なか}に向かつて矢^{はな}を放ちました。矢は大きな唸^{うな}りをあげながら飛んで行きました。そして彼らの真^まうえまでくると、地面^{じめん}にむかってつつみこむように大きな火柱^{ひばしら}をたたきつけました。

隣^{となり}の国の軍隊はあっというまに焼^やかれてしまいました。

兄はその足^{あし}で隣^{となり}の国の城に行きました。

城には隣^{となり}の国の王様^{おうさま}がいました。

王様は兄をみると言いました。

「お前^{へいたい}がわたしの兵隊^やを焼^{ころ}き殺したのだね。どうしてそんなひどいことをしたのだ」

「それは、あなたがこちらの国^{ほろ}を滅ぼそうとしたからですよ」

兄は答えました。

隣の国の王様は力なく両目^{りょうめ}をしばたかせました。

「だれがそんなことを言ったのかね。それはそうかもしれないが、そうでないかもしれないのだよ」

兄は、小さな火の矢で隣の国の王様を殺して、約束通り^{やくそくとお}その国の王様になりました。

兄はその国の王様になり、火^ひの矢^やの王^{おう}とよばれました。

それから十年の時^{とき}がなが^{なが}流れました。火の矢の王は国中^{たがや}を耕^かし、産業^{さんぎょう}をおこすことに力を入れました。とくに農業^{のうぎょう}と狩^{しゅ}猟^{りょう}にはねっしんでした。

それで、はじめは恐れていた国民^{こくみん}もだんだんと国王^{こくおう}を信頼^{しんらい}し、したうようになりました。

ある年、その年はとても天候^{てんこう}がわるく、空全体^{そらぜんたい}を雲^{くも}がおおい、晴れ間^{はま}のまったくない日がつづきました。

やがて作物^{さくもつ}は枯^かれてしまい、人々はとほうにくれて空^{そら}を見あげました。すると、きゅうに体の力が抜け^ぬ空にすいこまれてゆきました。人々は気味^{ひとびと きみ}がわるくなり、いそいで家の中に

に逃げこんで、だれも外に出なくなっていました。

それは、その国にかぎったことではありませんでした。世界中の国々みんながそうでした。

ある日、ある時、ある国に魔王^{まおう}があらわれて、雲におおわれた空の上から国中にひびきわたる声で言いました。

「私にはたくさんの命^{ひつよう}が必要なのだ。お前たちの命^{いのち}をわけておくれ」

魔王がそう言うと、外にいた鳥^{とり}や動物たちはみんな死んでしまいました。

驚^{おどろ}いたある国の王様は、軍隊に命じて空の上の魔王に射^い掛^かけましたがとどきません、大砲^{たいほう}をつかってもとどきません、どんなことをしてもだめでした。困^{こま}りはてた世界中^{せかいじゅう}の王様^{そうだん}たちは相談^{そうだん}しました。そして、火の矢^やの王^{ねが}にお願いすることにしたのです。

火の矢の王は、王^{たの}たちに頼まれるままに、火の矢をたずさえて城のやぐらの上に立ち、空を見あげました。

すると、雲におおわれた空の上から地鳴^{じな}りのような声がひびきわたりました。

「お前が火の矢の王だね。なぜ私を殺そうとするのだ」

火の矢の王は答えました。

「お前がみんなの命を奪おうとするからだ」

「私はお前たちの命そのものなのだよ、それでも私を殺そう
というのかね」

魔王は世界中に響きわたるような声で笑いました。

火の矢の王は、とほうもなく大きな火の矢をつがえると、
空の魔王にむけて放ちました。火の矢は、雲をつんざき魔王
をたちまちに焼き殺しました。

空いちめんが燃え上がり、まっかな火が地上をおおいまし
た。やがて魔王を焼いた火はどこまでも飛び散り、火の矢も、
火の矢の王も、火の矢の王の国も、そして、世界中のすべて
を焼きつくしてしまったのでした。

